

スペシャル対談「日本を背負う想い～世界にチャレンジ～」レポート

トヨタ・ABEMA

#世界にチャレンジ するアスリートの本質に迫る！トークショー開催

元女子バスケット日本代表・**三好南穂**、アーチェリー日本代表**武藤弘樹**元サッカー日本代表・**太田宏介**

世界を目指す練習方法や合宿での秘話、セカンドキャリアを語る

武藤「一番きつかった練習では1ヶ月毎日1000本打っていました」

太田「ビジネスをやりたい。色々準備もしています」特別インタビューも

新しい未来のテレビ「ABEMA（アベマ）」は、2022年11月24日（木）から12月1日（木）まで、世界で活躍するアスリートをゲストに招いたイベントを東京・渋谷の各地で開催しました。11月27日（日）・30日（水）には、トヨタ自動車に所属する選手・コーチら（GLOBAL TEAM TOYOTA ATHELETE）による、「#世界にチャレンジ」をメッセージとしたトークショー「日本を背負う想い～世界にチャレンジ～」を実施。当日の様子をレポートします。

トークショー1日目は、元サッカー日本代表で、「FIFA ワールドカップ カタール 2022」を全64試合無料生中継する「ABEMA」が支援するFC町田ゼルビア所属の太田宏介選手と、トヨタ自動車所属の元バスケットボール日本代表・三好南穂さんが登場。日本代表として感じた“日本を背負う”という責任感や、当時の体験について語り合いました。2日目は太田選手と、トヨタ自動車所属アーチェリー日本代表の武藤弘樹選手が対談し、武藤選手の驚きの練習方法に会場が盛り上がりました。イベント終了後は、太田選手に特別インタビューを実施。セカンドキャリアの構想など、今後の展望について聞きました。

GLOBAL TEAM TOYOTA ATHLETESとは、トヨタ自動車に所属し、世界に挑戦するアスリートたちの呼称です。「スポーツを通じた平和で差別のない社会づくり」を目指すトヨタ自動車は、世界に挑戦するアスリートたちを応援しています。今回のトークショーではトヨタ自動車の協力のもと、「#世界にチャレンジ」をキーワードに、世界で活躍するアスリート同士の貴重なコラボレーションが実現しました。



<11月27日（日） TOYOTA × 渋谷 PARCO イベントレポート>

日本を代表していると実感した瞬間は？両者ともに「試合前の国歌が流れている時」特別な思い語る



今回の一連のイベントでは、多くの人たちがサッカーを始めとするスポーツ界と接する機会を作ること、さらには渋谷の街全体の盛り上げを目的として、様々な企画を実施しました。

11月27日（日）は、渋谷 PARCO 屋上広場にて、元バスケットボール日本代表・三好南穂さんと、FC 町田ゼルビア所属・太田宏介選手によるトークショーを開催しました。この日は「FIFA ワールドカップ カタール 2022」における日本代表のコスタリカ戦を直後に控えてのトークイベント。選手のモノマネをして会場に集まるサポーターに対し、「皆さんめちゃくちゃ似てますね！」と話しかけるなど、和気藹々とした雰囲気でお話が始まりました。

序盤のトークテーマは、「日本を代表していると実感した瞬間は？」。太田選手は「満員のスタジアムで日本代表のエンブレムをつけて国歌斉唱をしているときですね。これから試合が始まることへの昂る思いと、緊張と、いろいろな感情が混じりあって震えました」としみじみと答えました。三好さんも「私も同じですね。試合前の国歌が流れている時です」と試合前の国歌斉唱への思いを語りました。「日本を代表するようになって変わったことはなんですか？」という質問には、三好さんが「SNS のフォロワー数ですかね。試合を重ねるごとに増えていって応援されているというのが実感できてすごく嬉しかったです。今日はサッカーのファンの方が多いかと思いますが、ぜひバスケットもよろしくお願いします」と茶目っ気たっぷりに答えました。

続いての質問は「日本の代表に選ばれた時、嬉しい気持ち、責任感、どちらの方が強くありましたか？」というもの。三好さんは「厳しい合宿を重ねてきたので、やっと入れたという嬉しさが一番でしたね。その後はすぐに、自分が入った分、落ちたメンバーもいるので、その選手たちや日本のために頑張らなければいけないという責任感が出てきました」とまわりのことも考え気持ちも徐々に変化していったようでした。一方、太田選手は「僕は自分の喜びでいっぱいでした。すごいですね、まわりのことも考えられていて」と感心した様子。さらに「嬉しい気持ちはありましたが、すぐに緊張に変わりました。当時の日本代表はメンツが濃くて。合宿では夕飯のテーブルで、トップ選手の中にひとつだけ椅子が空いていて、そこに座ることになったんです。試合では会ったことがありましたが、喋るのは初めてだったのでめちゃくちゃ緊張しましたね」と合宿での秘話を明かしました。

ドイツ戦で実感。太田選手「今の日本代表のチームワークの良さは、世界で戦える武器になる」



続いてお二人が語ったのは、「私生活で日本を背負っているんだと思うこと」。三好さんは「ひとつひとつの行動や挨拶をしっかりしないといけないなと思いますし、悪いことはできないですね」とチャーミングな笑顔を見せました。また、メディアへの出演についても「試合が終わった次の日から、毎日メディアという感じでした。男子バスケットは有名になってきていたのですが、女子バスケットはまだまだだったので、メディアに出たら爪痕を残そうと意識していました」と女子バスケットを盛り上げるために考えていたことを話してくれました。さらに「世界に負けていない日本人の強さ」というトークテーマでは、太田選手は「規律の正しさ。チームワークや戦術に対してみんなが監督から言われたことをしっかりやっているということですね。この前のドイツ戦を見ていると、個人個人の力はもしかしたら劣っているかも知れなくても、しっかりと隙を逃さない。全員で守って全員で攻撃するという規律の部分は、世界で戦える武器だだと思います」と話しました。

また、「日本代表だと短い時間で意思疎通をしなければならないが、そのためにやっていたことは？」という質問も。三好さんは「コミュニケーションをたくさんとることですね。日本代表だと年齢の差も出てしまうのですが、若い方から先輩にちょっかいを出して仲良くしてもらおうように努力していました。例えばコンビニに行って、買って～など言ったりしていました」と独自のコミュニケーション方法を披露。チームの雰囲気良くするために意識してやっていたと話しました。また、太田選手も同様に「キャラをわかってもらわないといけないので、ちょっとふざけたりとか、食事の後に一発芸をやったりとかは、僕にとっては輪に入るための大事なツールでした。あとは、代表チームの中で流行っていたアプリゲームがあったのですが、みんなのレベルに追いつくためにめちゃくちゃ課金しました」と思わぬ裏話も。三好さんもそれには「いくら使ったんですか？」と興味津々。太田選手は「90万くらいですね。でも僕にとってはグループに入っていくための先行投資です。おかげで共通の話題もできて、代表招集以外でもコミュニケーションの場としてすごく役に立ちました」と輪を重んじるチームスポーツならではの持論を展開しました。



最後のトークテーマは「日本を代表するアスリートに伝えたいこと」。太田選手は「この会場の一体感を見ればわかると思いますが、今日は皆さんひとつになって日本代表を応援しましょう！そしてまた、試合後にいい景色を見れるように頑張らしましょう！」と熱いメッセージを送りました。これには会場のボルテージも最高潮に。

トークショーが終わると、日本 VS コスタリカ戦がついにキックオフ。三好さん・太田選手による熱いトーク直後の会場は熱気に包まれ、大きな盛り上がりを見せました。

<11月30日（水） TOYOTA × 渋谷ストリーム イベントレポート>

武藤選手が明かす日本人が世界で戦うために必要なもの 武藤「正確性や精密さが大切」



11月29日（火）～12月1日（木）には、渋谷ストリームで「ABEMA FOOTBALL FESTIVAL in Shibuya」を開催。フットサルのコートを模したフォトスポットや、AR グラス「Nreal」の体験ブースなどを展開しました。

11月30日（水）には2回目のトークショーを開催し、太田宏介選手と、アーチェリー日本代表の武藤弘樹選手が登場し、会場を盛り上げました。トーク前半では「日本を代表することでプレッシャーは感じますか？」というテーマについて、太田選手は「招集を受けた時から、試合終了のホイッスルが鳴り終わるまで、ずっとプレッシャーを感じています。サッカーだけでなく、私生活も全てです」とコメントしました。気になるプライベートでのプレッシャーについては「まわりからの見られ方やサッカーへの姿勢はもちろん、身だしなみはすごく気にするようになりました。練習に行く時の格好など、日本代表の選手がカッコ悪かったら嫌じゃないですか。子供たちに夢を与えられるように、しっかりいいものを着て、いいものを身につけるというのは心がけていました。先輩からも言われていましたね」と話し、未来の選手に夢を持たせることを意識しているのだと感させました。また、武藤選手も身だしなみについては「僕も意識しています。その選手のイメージにつながるの。変わった服装をしている人、いいものを身につけている人、それぞれいますけど、いいイメージになるように心がけています。言動の部分も気をつけていますね」と、日本を代表する選手ならではの意見を聞かせてくれました。

続いて「日本人が世界で戦うために必要なものとは？」というテーマでは、武藤選手は「僕らは欧米の人たちと比べたら小柄だし、筋肉の量も少なくてパワーでは勝てないんです。弓を引っ張っている時も、力が強い方が有利なのですが、そういうところで勝てないからこそ、技術や集中力など、アジア人だからこそ補えるところをどれだけ磨けるのが重要だと思います」と回答。気になるアーチェリーの技術の磨き方については「1本真ん中に打てたら、また次の1本を真ん中に打つ。その繰り返しなんです。なので同じ動作をどれだけ続けられるかの正確性や精密さが大切です。自分の体でどれだけ覚えて、どれだけ詰められるかがその選手のレベルの高さに直結している部分ですね」と語りました。「最後の場面は本当に1本勝負なので、1本真ん中に打てればそれでいいんです。その瞬間の集中力があ

ればいいのですが、長い目で見ると予選や個人戦など 1 週間は競技が続きます。何百本も真ん中に打たなければいけないというのが僕らの競技なんです」とアーチェリーの面白さを話す武藤選手に、太田選手からは「普段どんなトレーニングをしていますか？ 食事とかも気をつけていますか？」などと質問が。武藤選手は食事について「人によりますが、僕はあまり制限しない方です。僕のコーチは『アーチェリー自体が緻密な練習を重ねてストレスのかかる競技だから、食事でまでストレスをかけたら逆に競技にとってマイナスになる。食事はあまり我慢しないでいいよ』と言ってくれます」とその自己管理方法について語りました。

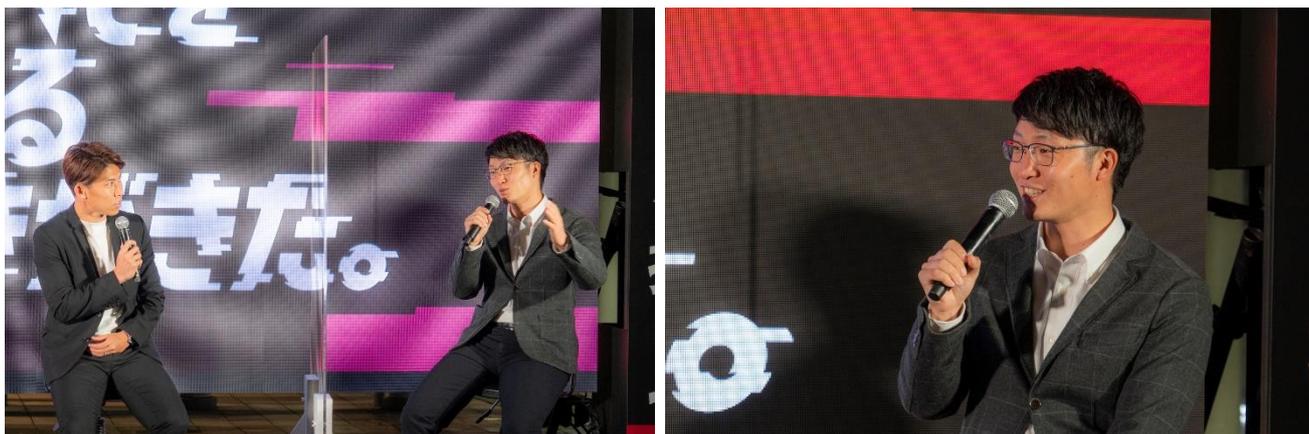
アーチェリーは 60 歳まで現役！ 一方、セカンドキャリアを考える太田選手は「ビジネスをやりたい」と語る



続いてお二人に聞いたのは、「痛感した世界の差」について。太田選手は「ハングリー精神ですね。僕のいたチームはアフリカ系の選手や南米の選手が多い地域で、そもそも育ってきた環境が全然違うんです。自分が活躍して稼いで、養わないと家族が生きていけない状況で、ヨーロッパに来て死に物狂いで戦っている。そもそものメンタルの差はすごく感じました。そしてそういう仲間にも勝っていかないといけないので、どこでそのモチベーションを埋めていくかというところすごく苦労しましたね」と自身の体験を交えて圧倒された経験について話しました。一方で武藤選手は「世界一の選手はシューティングマシン」とその高い技術力を評価。これから追いついていきたいと意気込みを語りました。そこで太田選手が「アーチェリーの選手はいつまで現役なの？」と素朴な疑問を投げかけます。これについては武藤選手から「本当に長い人だと、今の日本では 60 歳くらいの方もいます。世界だと長くて 40 歳くらい。それでも、長くまでやれるスポーツですよ。運動負荷がそんなに高くないので、楽しむだけなら 60 歳でも 70 歳でもできます」と驚きの回答が。J リーガーの平均が 26～27 歳のサッカーと比べるとぐんと長い競技人生に太田選手も驚いた表情を見せました。武藤選手は「そういう競争がないと、下の選手が育っていかない。アーチェリーはメンバーが変わらないんです。でも変わらないといけない。もっと新しい選手が出てきたらいいなと思っています」と未来の子どもたちに向けた思いも吐露。自身の活躍についても「僕らがメダルを取ったことで、次の選手がメダルをとるイメージを掴みやすくなる。日本は勝てるんだ、と思ってもらうことで、眠っていた思いを呼びさませたんじゃないかと思います」と思いの丈を語りました。

「今から本気でやったら、上を目指せますか？」と太田選手もアーチェリーに興味津々。武藤選手は「全然いけると思います！ コツさえ掴んで、集中力さえあればいけます」と、競技人生の長いアーチェリーだからこそその可能性を明かしました。

また、「今の日本代表の選手たちにアドバイスをかけるなら？」とのテーマも。太田選手は「今の逆境を楽しんでもらいたい。大舞台でスペイン代表と本気の試合をできるなんて、なかなかないこと。その状況を楽しんでほしいですね。そういう舞台で活躍して結果を残せる選手たちの集団だと思っているので、日本国民はみんな応援したいですね！」と熱い思いをぶつけました。



トークの後半戦では「世界と戦うために心がけていること」として、武藤選手が驚きの練習を明かしました。それは「1000本打つ」という練習方法。武藤選手はこの練習について「中高生の頃から人より1本でも多く打とうと意識してきました。今の世界のトップの選手は1日300本くらい打っています。それでも多いくらいですが、僕は大学生の頃からアベレージでその倍くらい。一番きつかった練習では1ヶ月毎日1000本打っていました。文字通り、血が指ににじむほど」とその過酷さについても言及。これには太田選手も「これですよ、メダリストの強烈な努力は！」とあまりのすさまじさに、笑顔を見せました。

最後に、今後のキャリアについて「指導者には？」と聞かれた太田選手は、「現役を辞めたら違うことがやりたいですよ。ビジネスをやりたい。今は色々準備もしています。もちろん、サッカーに100%を注ぎますが、その後の長い人生の準備もしっかり怠らないようにしたいなと思っています」と意外な展望を明かしました。

終始温かいムードに包まれ、大きな拍手の中トークイベントは終了。太田選手と武藤選手の人柄の良さが伝わってくるイベントとなりました。

■ 太田宏介選手 特別インタビュー

イベントに2日間登壇した太田宏介選手にインタビューを実施。2日間の感想や、イベント内で触れられたセカンドキャリアについてなど、今のスポーツ界に対する熱い思いを聞きました。

【詳細】

—2日間、トークショーに登壇いただいたご感想をお願いします。

サッカー以外のスポーツで活躍されている方との対談は自分にとって刺激になりますし、すごく楽しい2日間でした。まだまだ聞きたいことがたくさんあって、特に三好さんとは男女の差もあるので練習方法などをもっと聞きたかったんですけど、僕がMCみたいになってしまってもダメだなと(笑)。バランスを考えながら質問させてもらいました。そういうのも含めて楽しかったですね。アーチェリーと女子バスケットに携わっている知り合いはこれまでいなかったもので、こうして知り合えたことが嬉しいですし、試合にも応援しに行きたいです。

—三好さん・武藤選手のお話で共感したポイントや、逆にここは考え方が違うなと感じた話がありましたか？

アスリート同士、メンタルの部分は結構考えてることが一緒なんだというのは、トーク全体を通して感じました。違ったところは…やっぱりチーム競技（サッカーとバスケットボール）と個人競技（アーチェリー）とでは少し差はあるなと

は思いました。でも武藤選手も、個人競技だからといって何かに囚われている感じはなく、ご自身の中でストレスをかけずにフリーに競技に臨んでいるというマインドだったので、そこまで大きな差は感じなかったですね。探っていけばきっと何か差はあると思うので、もっと探りたかったです(笑)。

—1 日目は「FIFA ワールドカップ カタール 2022」日本 VS コスタリカ戦のパブリックビューイング、2 日目はフォトスポットが設置されるなど、一般の方々と距離が近いイベントでもありましたが、いかがでしたか？

今はサッカーをやっている自分にとってはホームな雰囲気ですし、特に 1 日目はパブリックビューイングの開始直前だったので、お客さんもみんな高揚した良い雰囲気の中で話せて、ありがたかったです。人前で話す場ではしっかり考えて話さないといけないので、言葉に重みが出ますよね。自分の過去を振り返るきっかけにもなりましたし、僕自身トークショーのような人前で話す場は好きなので、楽しめました。サッカーの世界だけで生きてきたので、こういった人前で話す場で他のスポーツの選手と交わる機会は、プライベートで食事するのはまた違ってすごく良い機会ですね。

—イベントではセカンドキャリアについてもお話いただきましたが、色んな業界の方から受けた刺激がご自身の活動にも影響する…ということもありますか？

そうなんです。こういう機会を知り合った方に、聞きたいことが生まれて連絡することはありますね。例えば「今アーチエリー界が置かれてる状況ってどうですか？」みたいな。僕としては今後にも生きるし、勉強になります。

—サッカーだけでなく、スポーツ界全体を見てらっしゃるんですね。

はい。スポーツビジネスはすごく興味があって、今までも自分の交友関係を広げてきて、色んな競技との接点はある状態なんですけど、こういうイベントや仕事きっかけで友達が増えていくのは嬉しいですね。

—「スポーツ界がもっとこうなったら良いのにな」と感じていることはありますか？

個人的には「サッカーを盛り上げよう」というよりも、マイナースポーツをもっとメジャーにさせるようなことをやっていきたいと思ってるんです。それこそ、アーチエリーというスポーツやそのルールがもっと世の人に知られたら良いとか、もっと TV での露出が増えたら良いとか考えていて、そういう活動をやりたいんですよね。一時期注目度が高まったカーリングやラグビーもその後が続かなかったりとか、マイナースポーツにおける改善点ってたくさんあると思うんです。そこに関わって、スポーツ全体を盛り上げていきたいと思っています。サッカーや野球は既に大きくなってから、もう認知度を上げる必要はないじゃないですか。サッカーにおいては、Jリーグは代表戦と比べると注目されていない、TV 中継も少ない、スタジアムでお客さんが少ないといった課題はありますが、それでもマイナースポーツをやっている人にとってはすごく羨ましい状況だと思うんです。観戦する側の人たちにとっても、もっと色んな競技を知って楽しめるきっかけにもなると思いますし、マイナースポーツがもっと稼げて、盛り上がるような仕組みを作っていけたらなと思っています。

—FC 町田ゼルビアに戻ってこられた今年は、太田選手にとって一つの節目の年にもなったかと思います。2022 年、ここまでを振り返っていかがでしたか？

大変な 1 年でしたね。2021 年 11 月から、オーストラリアのパースに住んでいたんですけど、遠征で都市の方に行ったらコロナの影響でパースに戻れなくなってしまって、今年の 4 月くらいまでずっとアウェーだったんです。そういう 1 年のスタートで、家族とも会えずずっとサッカー、でも試合はコロナで中止になって「何やってんだろう」みたいな。自分の中では、2022 年の 7 月でサッカーは辞めるつもりだったんです。日本に帰って辞めてからの準備を始めよう…というところで、地元の自分が育ったクラブからオファーをもらってサッカーを続けることになって。半年間で引っ越しもしたりと

か…海外の引っ越しってめちゃくちゃ大変なんです。日本に荷物が届くまでにも時間がかかるし、帰ってきてからの家も探さないといけないし、時間がない中ですべてを決めなきゃいけない。子供もいるので幼稚園のことや周辺環境のこととか、色々考えてたら本当に時間が足りない。足りない中でも練習は始まって…。新しいチームに行くのって、同じ日本人同士でもやっぱりエネルギーを使うんですよ、移籍って。そういう意味でもすごく大変でしたけど、なかなか経験できないことだと思うので、キャリアの中でも大きな、苦しかったけど楽しい 1 年でした。

—サッカーを続ける選択をしたのは、地元への思いが強かったからですね。

自分がキャリアをどこで終わるかを考えたときに、「最後は地元で終わる」というのが自分の中で一番きれいな形だったんですね。でもそれも需要がないと、チーム側から「来てくれ」と言われないと行けないわけで。自分がどれだけ理想を描いていても、「難しいだろうな」とは思っていたので、35 歳で区切りをつける、というのはもう何年も前から決めていました。

—そんな中で FC 町田ゼルビアから声が掛かったのは、イベント中にも話に挙げた「強烈な努力」があったからだろうと感じます。

自分の中では、そんなに努力したという感覚はないんです。振り返ってみると、負けたくない気持ちと「上に行きたい」という気持ちがあったから、自然とできてたんだろうなと思います。28~30 歳くらいが選手としてのピークだったとは思いますが、サッカーってピークを越えて身体が動かなくなってきたり、頭でカバーできるスポーツなんですよ。経験を積んだことで無駄な動きをしなくなるとか、ある意味賢くなってくるんですね。要領が良くなるというか。そうやってきてから、サッカーがさらに楽しくなりました。来年でプロ入りしてから 18 年になるんですけど、その年代ごとにサッカーへの取り組み方や思いが色々変わってきていて、僕はまだまだサッカー小僧、サッカー少年だなと思っています。

—サッカーをすごく楽しんでいらっしゃるのを、SNS などを見ても感じます。

不思議な感覚ですね。小学校の頃に習い事でやっていたことが仕事になって、お金をもらえるようになって。でも家族ができてからは“仕事感”が出てきて…不思議な感覚のまま大人になりました。ピュアですね(笑)。

—今でも少年の心のまま、サッカーを楽しんでいるんですね。

はい。でもその裏には、サッカーしか知らないことによる危なさもすごく感じています。だから若い頃から、プライベートの食事はなるべくチームメイトではなく違う業界の人と行くようにして、そこから今も横の繋がりがたくさんできてるんですけど、サッカー以外の話を聞くことで色んなことに興味を持ち始めています。人生全体で見ると、きっとサッカー選手を辞めた後の方が長いので。もっともっと稼ぎたいし、色んなところで刺激を受けて、たった一回しかない人生を豊かにできるように準備してる、という感じですね。

—色んなことに興味を持って活動なさっている太田選手ですが、来年の抱負を挙げるとしたら？

まずは、サッカーを楽しむ！サッカーを全力で楽しんで…いや、サッカーじゃないな。人生を楽しむ！長らくサッカー生活を続けてきて、若い頃とのギャップを感じることもあると思いますが、良いことも悪いこともすべて楽しむ。そして、それを次に繋げるための準備も楽しむ。大変なことも多いと思うんですけど、そんな 1 年にしたいですね。「楽しむ」が人生のモットーなので！

—最後に、今回のトークショーでは「世界にチャレンジ」をテーマに様々なお話をいただきましたが、太田選手が今後チャレンジしたいことは何ですか？

「世界にチャレンジ」というところで言うと、僕はヨーロッパに行って活躍できなかったので、子供を世界で勝てる子にしたいです。それはもうサッカーじゃなくても、どのジャンルでも良いです。とにかく若い頃から日本以外のところに触れさせて、グローバルに生きる子供にしたいですね。それが夢です。

■ GLOBAL TEAM TOYOTA ATHLETES について



「GLOBAL TEAM TOYOTA ATHLETES」とは、世界に挑戦するトヨタの仲間たちの呼称です。トヨタは、創業以来、どんなに本業が厳しい状況でも、また、社を取り巻く環境が大きく変わっても、一貫してスポーツの持つ「力」を信じ、スポーツを通じて、従業員の一体感を醸成し、士気を高めてきた歴史を誇りに思うと共に大切にしています。「チャレンジ」「ネバーギブアップ」「チームワーク」「リスペクト」といったスポーツの力は、トヨタが大切にしてきた価値観、企業風土そのものです。世界中で日々、様々なアスリートが地道に、強い意志と忍耐を持って挑戦を続けています。トヨタはこれからも、すべての人が自分自身の不可能に挑戦することが出来る、開かれた社会の実現を目指して、努力を重ねていきたいと考えています。

■ 登壇者プロフィール



三好南穂 (みよし なほ)

元女子バスケットボール日本代表。リオデジャネイロ五輪、東京 2020 オリンピックに出場。東京五輪では銀メダルを獲得。トヨタ自動車アンテロープスのガードとして活躍し、3ポイントシュート成功率 1 位、ベスト 5 の成績でリーグ連覇に貢献。昨シーズンで現役を引退後、トヨタ自動車のサポートコーチとしてチームを支えている。

©TOYOTA



武藤弘樹（むとう ひろき）

トヨタ自動車所属。中学1年時にアーチェリーを始め、高校1年時に世界ユース選手権に出場。2019年ワールドカップ第1戦、第2戦にて団体で銅メダル獲得。東京オリンピックではアーチェリー男子団体で日本初となる銅メダルに輝いた。ナショナル強化メンバーとしてパリ五輪でのメダル獲得を目標に活動中。

©TOYOTA



太田宏介（おおた こうすけ）

生年月日：1987年7月23日

出身地：東京都町田市

所属チーム歴：つくし野 SSS→FC 町田→麻布大学附属湊野辺高校→横浜FC→清水エスパルス→FC 東京→フィットセ・アーネム(オランダ)→FC 東京→名古屋グランパス→パース・グローリーFC(オーストラリア)

ゼルビア加入年：2022年

©FCMZ

■ ABEMA について

「FIFA ワールドカップ カタール 2022」

FIFA ワールドカップ カタール 2022 特設ページ

<https://abema.tv/video/genre/fifaworldcup>

<https://abema.tv/video/title/16-76>

FIFA ワールドカップ カタール 2022 完全ガイド by ABEMA

<https://times.abema.tv/fifaworldcup>

【公式】FIFA ワールドカップ カタール 2022@ABEMA Twitter

https://twitter.com/fifawc_ABEMA

「FIFA ワールドカップ カタール 2022」の日本史上初となる全 64 試合を無料生中継。同時刻に別の場所で開催される試合を含めた全 64 試合を、手軽な操作にて視聴することが可能なほか、リアルタイムでは見られなかった試合のフルマッチ映像を好きな時に何度でも無料で見ることができる「見逃しフルマッチ配信」や、毎試合の名場面を試合直後から楽しむことができる「ハイライト映像」も無料で視聴いただけます。

さらに、「ABEMA」のために集結した豪華解説陣による解説をはじめ、「ABEMA FIFA ワールドカップ 2022 プロジェクト」GMの本田圭佑さんやナインティナイン・矢部浩之氏さん、千鳥・ノブさんらも「ABEMA」と一緒に本大会を盛り上げます。そのほか、数台のカメラ映像から好きなアングルを選ぶことができる試合の「マルチアングル映像」、声援を投げかけ合いながら観戦できる「コメント機能」、試合中に試合情報・選手情報などを観戦しながら確認できる「試合データ」、「ABEMA」オリジナル企画など、本大会をあますことなく楽しむことができる様々な取り組みを提供予定です。さらに、スマートフォン、PC、タブレットなど、ライフスタイルに合わせていつでも視聴が可能で、テレビの大画面でも大会をお楽しみいただけます。（<https://contents-abema.com/fifaworldcup/tv-howto/>）全ての視聴者に安定した視聴環境を提供することを目指しており、今後、「ABEMA」を通じて新しいスポーツ観戦体験と、最高の「FIFA ワールドカップ カタール 2022」をお届けできるよう努めてまいります。

本件に関する報道機関からのお問合せ先

株式会社 CCPR 担当：佐々木

MOBILE : 050-5370-2742 FAX : 03-5428-4647

MAIL : sasaki@ccpr.jp